

第19回心理学講義

2014. 11. 12

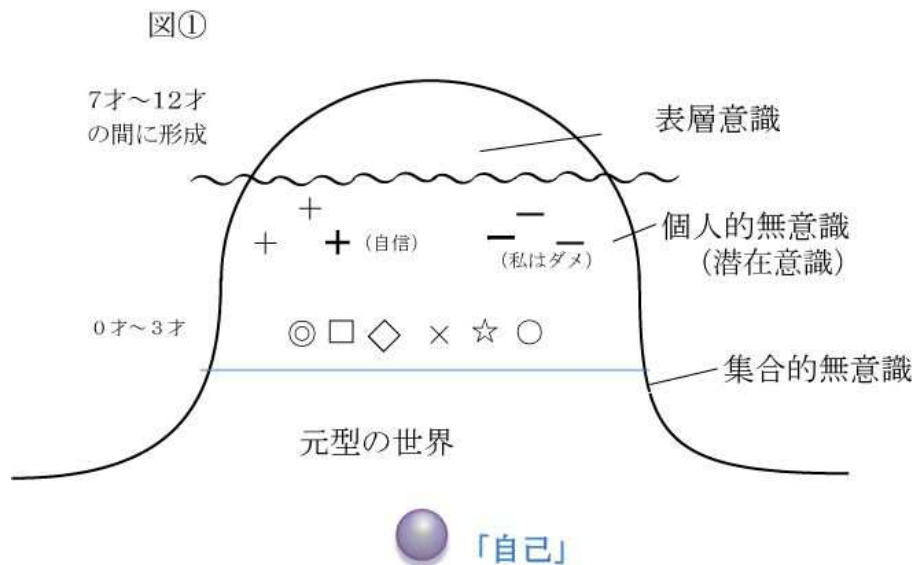
意識の構造図の説明

◎ユングの意識図の説明・・・図① 参照

これから説明する意識の構造はユング心理学を基にしています。

図を見てください。波線より上の部分が表層意識です。表層意識は意識全体（表層意識・無意識を含めた）の5～10%程度（氷山の一角）と言われています。よく氷山の一角と表現されます。

この表層意識は論理的、合理的、分析的、功利的、言語的という性質があります。



波線の下は無意識です。この波線は表層意識と無意識を分ける壁・柵です。

無意識の領域も二つに分けられます。上の方を「個人的無意識（潜在意識）」といい、下の方はさらに深い意識で、人類に共通している無意識で「集合的無意識」といいます。

◎集合的無意識

普遍的無意識とも言い、この領域は人類が共通して持っている内容（＝元型）によっ

て構成されています。ユングは世界中の宗教的象徴、神話、昔話、文学作品、芸術等の研究を通じて、人間の無意識の深層に人類共通のシンボリズム(象徴)が存在することを見出しました。それを元型と呼びました。

●元型

人の心の働きの原パターン。行動のパターン。それは種である人類に共通している。動物などの本能パターンと類似。

心における人間の傾向性・可能性であり、活性化されたときはじめて特有の形式と意味を持って現れる、とユングは言っています。

元型には例えば、グレート・マザー(太母)とよばれる母性の元型があります。どんな人にも「母性」の可能性・傾向を持っているということです。女性にも、男性にもあります。

育み慈しむ心の働きの原パターン。

グレートファーザー(父性)、影、アニマ(内なる女性)、アニムス(内なる男性)、老賢者、自己などがある。

仏性＝誰もが持っている仏陀になる可能性⇒元型

●元型という概念を設定した経緯

ユングは、統合失調症患者の妄想が豊かな空想内容を持っていることが多く、それらを研究していると、初めは混沌として多様であったイメージが一定のモチーフや形式へと凝縮されていき、それは多くの人において同一のまたは類似した形で繰り返されることを見出した。

夢、空想、神話、おとぎ話、宗教的儀礼など多くのイメージを作り出す。世界各地のそれらの研究と多くの患者のイメージに共通した主題、パターンを見つけ出した。無意識のなかにそうしたイメージに形を与える元の型があるのではないかと考えていった。

元型があるのではという根拠のひとつの例

ユングは統合失調症の患者が目を細めて太陽を見ながら頭を左右にふっているのを見た。患者は、目を細めて太陽を見ると太陽のペニスが見え、頭を揺り動かすとそれも動くが、それが風の原因だという。その後ユングがギリシャ語で書かれたミトラ祈祷書についての本を読んでいると、太陽からありがたい筒が下がっているのが見え、それが西に傾くと東風が吹き、東に傾くと西風が吹くなどのことが書かれていた。

この患者はギリシャ語は読めないこと、この書籍は患者がユングにこのことを語った

後に出版されたこと、病院で隔離されていたということから、このような内容をどこかで読んだとは考えられないという。

多くの患者の臨床例と世界各地の神話、おとぎ話などの研究から元型の存在を仮定した。

●元型に呑み込まれる

元型は静的なものではなく、動的・エネルギー的なもので、衝動的、激情的なものなので、自我がその力に翻弄されて、呑み込まれてしまうことがある。

自我肥大というのもそのひとつで、神的イメージ体験に自我が呑み込まれてしまい、神と自分を同一視してしまい、自分は神だと思ってしまうもの。

また、現実の女性にアニマを投影し、それに翻弄されてしまう。生真面目で身持ちの固い男性が、エロスのアニマを女性に投影し（投影される女性も投影されやすいエロスの要素が強い）、その女性に翻弄し身を持ち崩すなど。他人から見るとバカなことをやっていると思うが、本人はハマっている（アニマに呑み込まれている）ので冷静に判断できない状態。

このように強烈な元型に呑み込まれないようにするためには、強靱な自我が必要。これは自己中という意味での強さではない、自己中はそういう意味では弱い脆弱な自我と言える。

元型を意識面に取り込んでいくには、元型との心理的格闘が必要となってくる。そして、元型の発達を促すことになる。

例えば、アニマなどエロスの女性像（娼婦型）から、ロマンチックアニマの段階（1人の女性に対する愛）、次の段階は霊的な段階、聖なる愛、聖母マリアなどが典型。河合隼雄氏はこの段階のアニマとして中宮寺の菩薩像をあてている。最終段階は、両性具有的なものだという。

★交流分析の自我状態と元型

交流分析の自我状態のなかで、CP（厳格な親）、NP（養育的親）、FC（自由な子ども）などは、グレートファーザー、グレートマザー、永遠の少年などの元型と対応している。

CPの背景にグレートファーザー（父元型）、NPの背景にはグレートマザー（母元型）、FCの背景には永遠の少年（子供元型）の働きがある。

例えば、NPを高めるという場合、潜在的母性である元型にアプローチする方法もあるのではないか。

（AやNCもしっかりと考察すれば対応する元型がはっきりすると思われる）

★自他の区別を超える

元型自体、超個人的なものなので、それ自体は自他の区別は超えているが、私たちの通常の意識における自他の区別を和らげるために元型および集合的無意識の概念をどう役立てるか。

共通の元型パターンがある。しかし、その顕現の程度や発達度は人によって違う。自分が顕現させていなくて、他人が顕現させている。あるいはその逆もある。

その場合、自分にはこういう要素はなく、他人にはある。他人と自分は違うと考えるのではなく、自分の中にもあるが顕現していないだけだと考えられるようになる。自他は変わらない同じだと区別は消える。

意識図②で視覚的に共通しているのがわかるが、その中身（元型）も共通しているんだと理解する必要がある。

意識＝自我（島）は、無意識全体（大海）の一部が現れ出たもので心全体の要素のある一面で形成されている。その現れ出方が違うだけだという理解、全体は同じだという理解。

●「自己」

そして、元型の精髓と言われているのが「自己」という元型です。「自己」とは、「本当の自分」といったらわかりやすいでしょう。ですから、私たちの心の深いところには「自我」とは違う「本当の自分」があるのです。それは、二元に対立する要素（男女、善悪、光と闇など）を統合する中心（一元）であるといえます。

ユングは「自己」について「自己とは意識（この場合の意識とは、意識と無意識を合わせたもの）の中心であり、意識全体でもある」と言っています。

さらに、「これは自我と一致するものでなく、大きい円が小さい円を含むように、自我を包含する」とも言っています。

ユングの「自己」という概念はわかりにくい概念です。それでユングにある人が「自己というのにはわかりにくいから、もっと具体的にわかりやすく教えてください」と言ったところ、ユングは「ここにいる皆さん一人一人が私の自己です」と答えたということです。

余計にわからなくなってしまうかもしれません。ただ、日本人というか、東洋人に

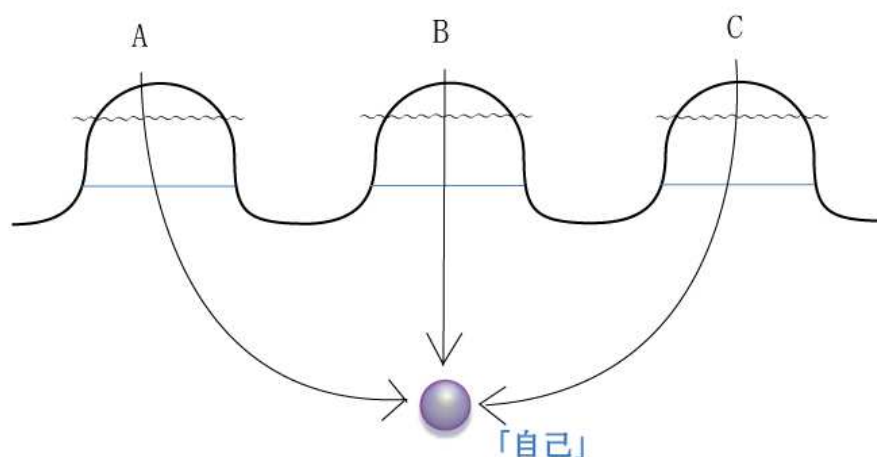
は西洋人に比べわかりやすい概念ではないかと思います。「内なる神」「本来の自分」ヨガの言葉で言えば「真我（アートマン）」仏教では「仏性」「空」といわれるものと同じと捉えていいと思います。

そして、この意識図を一人の意識図でなく三人分の意識図をつなげて描くと図②のようになります。

集合的無意識の部分でつながっているわけです。私たちは、他とは区別された孤立した存在だと思っていますけれども、そうではなく皆つながっているのです。

「自己」はAさんの「自己」も、Bさんの「自己」も、Cさんの「自己」も共通な「自己」です。

図②



この図を見ると、ちょうど波のようにみえます。私たち一人一人は、大海の波のようなものと言えるかもしれません。大海と切り離された波はありません。大海と波は区別できないのと同じように、私たちも他すべてとつながっている、一体なんだということを現わしています。

●ユングの意識の構造と仏教の唯識思想との類似

上記のユングの意識の構造と仏教の唯識思想での意識の構造は類似している。

唯識思想とは大乘仏教の深層心理学とも言われるもので、人の意識が8つの意識構造からなっていると説く。

心（識）だけは仮に存在すると考え、深層意識の阿頼耶識が自分の意識も外界にあると認識されるものも生み出していると考え、最終的には阿頼耶識もまた空であるとする。

ユング

表層意識
個人的無意識
集合的無意識

唯識

前五識（五感）と意識
末那識（マナシキ）
阿頼耶識（アラヤシキ）